

薬剤感受性検査では、PCG, ABPC, FMOX, IPM, MINO, CLDM に高い感受性を示した。

7) 慢性涙嚢炎の Fosfomycin 投与によるサイトカインに及ぼす影響

大石 正夫(白根健生病院眼科)
宮尾 益也(新潟大学眼科)

【目的】慢性涙嚢炎は鼻涙管狭窄に起因する細菌性感染症で、保存的治療(点眼, 涙嚢洗浄など)により、ときに急性増悪を繰り返す難治性の症例を経験する。Fosfomycin (FOM) には抗菌作用の外に、種々の生物学的活性を有することが報告されている。今回、難治性の慢性涙嚢炎の症例に FOM を投与して、in vivo におけるサイトカインの産生に及ぼす影響について検討した。

【方法】3%耳科用 FOM 液 1 mL を涙嚢内に注入、週1乃至3回投与した。FOM 注入前、注入後に涙嚢内を生食水で洗浄し、これを検体として ELISA を用いて各種サイトカイン濃度を測定した。

予備実験として行った症例で、IL-8 は全ての検体で高濃度に検出された。IL- β は低値を示し、IL-4, TNF α は検出されなかった。よって今回は IL-8 に測定を絞って FOM の影響をみることにした。IL-8 値は検体の総蛋白質量を基準に算出した。

【結果】検体の性状で、膿性, slime (+++) のものでは IL-8 は高濃度を示した。7 症例に FOM を注入して、6 例には検体の性状の改善に伴い、IL-8 値の低下が認められて有効に作用した。のこり1例では、はじめ IL-8 は低下したが後検体の性状の悪化とともに上昇した。

これら IL-8 値の変動は、検体の性状をほぼ反映するものであった。FOM 涙嚢内注入による副作用はみられなかった。

【結論】FOM 液を涙嚢炎症例の涙嚢内に注入して、検体の性状の改善に伴い IL-8 値の低下がみとめられて、FOM による涙嚢内サイトカイン産生への影響が示された。また、慢性涙嚢炎に対する FOM 局所療法の有用性が認められた。

8) 腸管出血性大腸菌 O157 の薬剤耐性: 動向と耐性メカニズム

山本 達男・種池 郁恵(新潟大学
細菌学教室)

目的: 腸管出血性大腸菌は腹部症状の他に、HUS や脳症等の深刻な合併症を惹起するが、感染の初期には、化学療法が有効であると考えられている。本研究では、わが国の腸管出血性大腸菌の薬剤感受性を調査した。

材料と方法: 平成8年の大流行時とそれ以降に分離された腸管出血性大腸菌を用いた。MIC は日本化学療法学会の標準法に準じて測定した。耐性遺伝子については PCR を行い、塩基配列を解析した。

結果と考察: テトラサイクリン (TC), ストレプトマイシン (SM), スルファメトキサゾール (SMX), カナマイシン, ナリジクス酸, アンピシリン, クロラムフェニコールで耐性がみいだされた。米国で報告されたウシ O157 由来の TC, SM, SMX 3 剤耐性がわが国でも確認された。耐性を示した薬剤は、家畜に使用している薬剤と一致する。米国の場合と同様で、わが国の O157 の薬剤耐性もウシ等の家畜に由来していると考えられた。

II. 特別講演

「感染症の最近のトピックス」

— エイズを中心に —

東京専売病院院長

島田 馨先生